

奥山おくやまに枝折しおる葉はは誰たがためぞ

親おやを棄すてんと急いそぐ子このため



画:伊藤彩香

その時、息子は思いっきり泣いた。
母の願いに抱かれて思いっきり泣いた。

むかし、あるところに「一定の年齢を過ぎた年寄りは山に捨てるように。」という「姥捨て」の掟を課された村がありました。

そんなある村で、明日には「姥捨て山」に捨てられる年老いた母とその息子が最期の夕食をとっていました。

「ずっと話し合ってきたことじゃ。私の事ならお前はなんも心配せんでええ。それよりしっかりと食べておくれ。」

息子はうつむいたまま涙をかみしめているだけで、食事ものを通りません。時間だけがただむなしく過ぎていきました。

翌朝、息子は母を乗せたかごを背負って、いよいよ山に向かうことになりました。しかし、長い道を歩いていくうちに、辺りは薄暗くなり、来た道さえも分からなくなってしまいました。

そして山の入り口まで来た時のことです。息子はふと、背後で妙な物音がしていることに気づきました。それは、背中の母が木の枝を折っている

音だったのです。息子が、どうしたのかと恐る恐る尋ねると、母は微笑んで言いました。

「ああ、これか？もう暗くなってきたで、お前が帰るとき道に迷ったら大変だと思っただけ、目印を付けているんだよ。さっきからずっと付けておいたから、気を付けて帰るんだよ。」

それを聞いた途端、息子は母を背負ったまま一目散にもと来た道を引き返し、走り始めました。

「何をしてる。母ちゃんを捨てていかないとお前がおとがめを受ける。母ちゃんを置いていけ。」

母の言葉にも息子は立ち止まりません。溢れる涙をふきながら家まで帰り着き、母を抱きしめ大声で泣いたのでした。親を捨てようとした息子であるうとも、決して見捨てることのない親の願い。それが苦しくて。でも嬉しくて。

自分のことよりも、息子の命の行く末を案じる大きな願いに抱かれて、彼の心は救われたのです。

※この『姥捨て山』の話には諸説あります。



浄土真宗本願寺派

生活に染みこむお慈悲の心

ノーベル物理学賞を受賞されたアインシュタイン氏は、日本で講演するため、1922（大正11）年11月17日、夫人と共に来日されました。

その旅の途中、日本の心、特にかねてより興味を持たれていた「仏教の心」について、お坊さんにお尋ねをされます。

その問いに対して、浄土真宗（真宗大谷派）の近角常観ちかすみじょうかん氏が「姥捨て山」の話を譬たとえに出され「この母の心こそ、仏の心です。この母の姿こそ、仏の姿です」と答えられました。

その話に静かに耳を傾けられていたアインシュタイン氏は、「日本人の心豊かな優しい心を支えている仏教の、人を思いやるという慈悲の心に触れたことが、私にとって何にも勝る日本の手土産です」と、涙を浮かべて述べられたそうです。

お慈悲の話を聞いてみませんか？

古歌の中で、「枝折る菜しおしおり」は親を棄すてる子のためであると詠まれています。

捨てられる側の母も知っていたのでしょうか。捨てていかなければならない側の苦しみを…。

だからこそ、母が枝を折っていたのは、苦しみ悩む息子の為でした。

アインシュタイン氏は「人を思いやる慈悲の心」を通して、仏さまのお慈悲の心を感じられたのでしょうか。

©ともしえ

この広告に対するご感想をお聞かせください。

本願寺山口別院では、毎月5日13時30分より、常例法座で仏さまのお慈悲の話を聞くことができます。お問い合わせは右記へ。



本願寺山口別院

浄土真宗本願寺山口教区教務所

〒754-0022 山口市小郡花園町3-7

TEL:083-973-4111 FAX:083-973-4631

山口別院

検索

<http://yamaguchibetsuin.net>